

6年1組

高く 長く 美しく飛ばしたい わたしの竹とんぼ ～やっと会えた 国際竹とんぼ協会高橋先生との交流～ ～竹とんぼの魅力を味わってほしい善光寺びんずる市への出店～



☆やっと会えた 国際竹とんぼ協会高橋先生との交流☆

12時34分、附属長野中前駅着の電車。大きなケースを両手に抱え、国際竹とんぼ協会会長、高橋達郎先生が降りてきました。駅に迎えに行った子どもたちは高橋先生に向かって大きく手を振りました。「すごい。本物だ」とつぶやく子どもたち。これから始まる特別な時間に胸を躍らせているようでした。K君は夢の懸け橋の階段をのぼりながら、自己紹介よりも先に自分の作った竹とんぼを高橋先生に手渡しました。「よくできてますよ。大事にしてください。」そんな言葉をかけてもらったK君はとてもうれしそうでした。「自己紹介よりも先に竹とんぼを渡す」そんな姿からも、どれだけ高橋先生と会えるのを楽しみにしていたかということを感じました。すると、夢の架け橋から校舎を見た高橋先生が「いい学校ですね。これがグラウンドかあ。広いですね。でもこっから超えちゃうな。今日は2、3個無くなっちゃってもいいでしょう」と楽しそうにおっしゃいました。高橋先生が作る竹とんぼがどれだけ価値のあるものか知っている私は、「無くなってもいい」とさらりと言う高橋先生からも今日の交流会を楽しみにして下さっている気持ちを感じることができました。お互いの気持ちを感じながら、私は、教室に向かう道中からすでに、これからの時間への期待で胸が高鳴っていました。



教室に入ると、すぐに国際竹とんぼ協会のはっぴをまとい、お話を始めてくれました。「今日は、移動博物館です」と言いながら見せてくださった竹とんぼは、まさにお宝の山でした。「30時間以上磨いた竹とんぼ」「10倍以上の大きさの竹とんぼ」「究極の羽が薄い竹とんぼ」「1cmにも満たない極小竹とんぼ」「『あ』っと驚く『あ』とんぼ」「3枚ばね、4枚ばねの竹とんぼ」などなど…。これらは、これまで子どもたちが本でしか見たことのないものでした。そんな伝説の竹とんぼを見たり触ったりできることは、子どもたちにとってどれだけ貴重な体験であったのかはかり知れません。そして最後に高橋先生が見せてくださったのは、国際竹とんぼ協会を立ち上げた「秋岡芳夫先生」の竹とんぼでした。「値段には代えられない、神様の竹とんぼです。」と言いながら、子どもたちに手渡してくれました。そのフォルムの美しさ、回した時の手に伝わるエネルギー、本当に心奪われるものでした。もう手に入れることのできない貴重な竹とんぼにもかかわらず、それに触らせてくださる高橋先生が、子どもたちのことを信頼して渡してくれたのだと思うと、その事もうれしくてたまりませんでした。



Aさんは日記にその時のことを次のように振り返っています。

…秋岡先生の竹とんぼは、見てすぐに「宝物だな。私達が見ていいんだろうか」と思ったくらい凄かったです。本当にきれい。形のデザインもかっこよくて、羽の表面も裏面もツルツルピカピカで、本当にきれいで見惚れてしまいました。あの軸付近の羽はどうやってやるんだろう、鉛の付け方も教わりたい、どうやったらこんなに綺麗な羽、軸、竹とんぼができるのか知りたい、ひねりはどうやるの？本当に竹とんぼ？というように、すごく聞きたいことや思ったことが出てきました。わたしの中では、その時はもう、ずっと竹とんぼを見て高橋先生に質問したいと思っていました。本当に、それくらい、秋岡先生の竹とんぼに魅せられていました。この竹とんぼは竹とんぼの理想だと思いました。…（Aさんのchromebookの日記より一部抜粋）



宝物を見せていただいた後は、竹とんぼづくりです。当初の予定では、「善光寺びんずる市に出品する竹とんぼを作ろう」と高橋先生からご提案いただき、子どもたちもそのつもりでこの日を迎えていました。しかし意外なことが起きました。いや、当然の出来事だったかもしれませんが、それは、子どもたちが竹とんぼを作り終えた時には、誰もが今作っている竹とんぼを「自分のもの」と考えていたのです。竹とんぼの羽に自分の名前を書いたり、高橋先生にサインをもらったり…。「高橋先生と一緒に作った竹とんぼ」は売り物ではなく「私の竹とんぼ」に変わっていくのだと思いました。

そして高橋先生の試技がグラウンドで行われました。その時の様子を振り返ったK君は次のように日記に書きました。

…そして何より今日！ 一番驚いたのは高橋さんの飛ばす姿でした。手から竹とんぼが離れる瞬間ビュンと空に飛んでいく竹とんぼはもはや夢に感じました。そして本物のおりゃーは全然自分のとは違いました、高く飛ばすぞーという気持ちも飛んできました。高橋さんの足元を見ると土が削れていました。足にも力が入っていることに気づきました。…

(K君のchromebookの日記より一部抜粋)

どこまでも飛んでいく竹とんぼは、空からいつまでも落ちてこないようでした。まるで空に引っかかっているような感覚です。迫力のある「おりゃ〜」の掛け声とともに高橋先生の手から離れていく竹とんぼを「ここまで飛ぶのか…」と、子どもたちは竹とんぼを目で追いながら感じているようでした。試技を終えた後で子どもたちは高橋先生にサインを求めて集まりました。サインをもらった竹とんぼをグラウンドで飛ばし始める子どもたち。Kさんは「高橋先生からサインをもらった竹とんぼ、めっちゃよく飛ぶ！」と嬉しそうに話してくれました。それはおまじないでもなんでもなく、Kさんにとっての事実なのだと私は思います。



子どもたちとの別れ際、最後のあいさつの場面で高橋先生の目には涙が浮かんでいました。こらえきれず涙した高橋先生。こうして、子どもたちと出会えたことや一緒に過ごすことができたことに喜びを感じてくださった涙なのかと思うと、私も胸が熱くなりました。

高橋先生が子どもたちに残してくれたもの。それは竹とんぼやサインだけではなく。

「私も高橋先生みたいに色々なことに挑戦してみたいと思いました。」と振り返ったSさん、「今回の交流を通して思ったことはやっぱり努力って大事だなと思いました。高橋先生もめっちゃくちゃ努力されていると

一瞬で分かりました。だから私も（竹とんぼだけじゃなくて）いろいろな事に努力をして行きたい」と振り返った紗菜さんから分かるように、自身の生き方を考えるきっかけもいただくことができました。それは、子どもたちの高橋先生の生き方やその人柄を感じ取った姿でした。

「高く 長く 美しく飛ばしたい 『わたしの竹とんぼ』」はこれからも続いていきます。

☆竹とんぼの魅力を味わってほしい善光寺びんずる市への出店☆

「竹とんぼの魅力を味わってほしい」そんな願いを携えて、善光寺びんずる市に参加してきました。当日は、子どもたちの願いが通じたかのような晴天が一日中続き、とても気持ちがよかったです。この日は、予想を大きく超えるたくさんのお客さんが「6年1組竹とんぼ」のお店に来店してくださいました。お客さんと楽しそうに話している子どもたちの姿、そして竹とんぼで遊ぶ人たちが溢れている芝生の広場を見て、私はとても幸せな気持ちでいっぱいになりました。



～職人になったIさん～



竹とんぼ製作体験を担当していたIさんは、「一人ひとりにさ、教えるのって想像以上に時間がかかるよ」といいながらも、お客さんが上手につくれるようにサポートすることができたことに、とてもうれしそうな表情を浮かべていました。お客さんとしてきてくれた大畑先生が、「あれは職人だ…」とつぶやくほど、Iさんはその活動にのめり込んでいました。その後も、お昼ご飯を食べる時間を削ってまでその場でお客さんと竹とんぼづくりをしていたIさんは次のように振り返りを書きました。

僕は、学んだことってというか、わかったことなんだけど、今まで自分のやっていたことがちゃんと、他の知らない人につながるといのがわかりました。自分が見つけてきたコツ、見つけてきた気持ちよさ、それを全部びんずる市で使って、すごい楽しんでもらえて、小刀を使ってもらっているときに、気持ちいい？と聞いたりすると、うんといってってくれたり、自分がやってきたことにはちゃんと意味があった、今まで全部1人の中で完結していたから、前よりも、自分のやっていることに自信が湧いてきた自分のやっていることは色んな人にわかってもらえているってというのがわかった。それが嬉しかった。これからも自分の気づいたものをどんどん発信していきたいです。

～小さい子に教えるのが上手なOさん～

Oさんは「飛翔遊び」の担当でした。「小さい子に教えるの上手じゃん」と話しかけると、隣にいたSさんも「上手かった」とうなずいていました。すると笑顔で「とにかく教えなきゃって思って」といいながら、「弟いるんだけど、言って教えてもできなくて…、教えるにも実際にやるしかなかったから」と自分の体験を語ってくれました。そんな体験を生かして接していたOさん。上手く飛ば

せなかった子も、一緒に飛ばすと、不思議なほど上手になりました。そんなOさんは振り返りのときに、「小さいこと一緒に飛ばしたことだけじゃなくて、僕のことを覚えていてくれたことがうれしかった」と教えてくれました。初めて出会った子とOさんをつないでくれた竹とんぼ。そしてその竹とんぼの楽しさを相手に伝えられたのは、間違いなくOさんの、相手を思いやった、優しいかわり方にあったのだと思いました。



～私たちがつくった看板を掲げ 声を出すSさん～



Sさんの担当は「会場」でした。絵を描くのが得意なSさんは、KさんやHさんと一緒に、前日までにポスターを描き上げていました。初めはテントに飾ってあったポスター。しばらくテントの近くでじっと周りの様子をうかがっていたSさんを見て、お客さんや友だちのやりとりを見ながらその場の雰囲気を楽しんでいるなあと感じた私は、その様子を見守っていました。それでももう少し時間が経ってから、「せっかくだから…」とポスターを持ってみたらどうかということをご提案してみると、初めははずかしそうにしていたSさんもだんだんとKさんやHさんと一緒に声を

出してアピールするようになっていきました。おかげで多くのお客さんの目にとまり、お店はますます盛況を見せていくのでした。お客さんとしてきてくれていたK実習生はその様子を見て、「Kさんはおとなしめの子だなという印象でしたが、看板を高く掲げて周囲のお客さんに向けて大きな声で宣伝している姿を見て、新たな一面を見ることができてうれしかったです」と、Sさんの姿について語っていました。

「何かおかしいな…」そんな気持ちがあったのは、お店が終わって片付けの指示を出した時でした。

それは、開店してから、一度も指示を出していないことに気づいたからです。お昼の時間も自分たちで考えて食べていたり、飛翔遊びで考えたスタンプラリーのスタンプ数も「これじゃ集められる人がいない」と気づいたら自分たちでルールを変えていたり、竹とんぼの数が足りなくなったらその場でつくっていたり…。全く指示を出すことなく、子どもたちは最後までやりきっていたことに気づいたときは、少し震えました…。

「善光寺びんずる市」という場で見せてくれた子どもたちの姿。それは、教室という場所を飛び出し、自ら動き出していく子どもたちの姿でした。竹とんぼを通して社会とつながっていく、竹とんぼを通して私を知る、竹とんぼを通して私の新たな一面に出会う、そんな子どもたちの姿と一日中出会うことができた私は、今日の善光寺びんずる市の中で一番の幸せ者だったかもしれません。

